

人権だより No.1

2019.7.12

人権教育推進委員会

本年度の5月10日(金)に北京パラリンピックに出場されたの高田朋枝さんを招きあすチャレスクールが開催されました。また、昨年度、本校の教員が四日市市内の中学校で視覚障がいのことや、普段の生活について講演と体験を行いました。今回はこれらの様子や児童生徒の感想などをお伝えしたいと思います。

あすチャレスクール ～心が動く、明日を変える～

高田さんは「ともちゃん」、スタッフの3人は「やまちゃん」、「がっちゃん」、「あーちゃん」とニックネームで呼び合い非常に和やかな雰囲気での始まりでした。



体験ではみんなでディフェンスの方法を教してもらったり、ゲームを実際にしたりしました。体験した児童生徒からは「やってみるとおもしろい」など、いろいろな感想が聞かれました。

ディフェンスの練習が終わった後、ともちゃんはデモンストレーションで小学部から理療科の方が投げるボールを一人で守ってくれました。ゴールを阻止するたびに児童生徒から大きな歓声が上がりました。最後にともちゃんはどのくらいのスピードでボールを投げるのかということで、実際にボールを投げてもらいました。回転投げで投げたボールのスピードに周りのみんなは驚いていました。





後半の講演では、ともちゃんが今までに経験したいろいろな話を聞きました。小さい頃に兄弟は許されても、自分には危ないからとやらせてもらえなかったこと、大学に行って普通に友達がほしかったのに、「何か出来ることがあれば言っただけ」と言われたとき、障がいがあることのもどかしさを感じたそうです。しかし、ともちゃんはそのようなことがあっても、いろいろなことに積極的に挑戦していったそうです。ゴールボールの世界のレベルに触れるため、一人で外国の旅もしました。初めは「自分だけで大丈夫かな」と非常に不安だったそうです。

しかし現地に着くとそういった不安はすぐになくなり、空港からバスに乗せてもらい目的地のバス停まで行くことができました。その他にも、自分から声を出して支援を求めなくても、すぐに周りの人が声をかけてくれ、時間があれば行きたいところまで連れて行ってくれたそうです。それらが自信になり、10ヶ国もの国々を一人で回られたそうです。

「あすチャレ」とは「明日へのチャレンジ」の略

ともちゃんが地域の小学校に通っていたとき、弱視でみんなと同じ事が自分にはできない、みんなと自分が違うのかなと感じたことがあるそうです。そんなとき担任の先生が「高田さんはみんなと何も変わらないんだよ」と言ってくれたことが「そうなんだ」と気持ちを楽にしてくれたことを話してくれました。

宣言シートという形で児童生徒から集めた声には、「10個の国をいったのがすごいと思いました」「強く生きられることがよく分かったので、自分も見習っていきたくてと思いました」「いろいろなことをやってみようと思うのはすごいなと思いました」「いろいろなことに前向きに挑戦して乗り越えていきたいです」「自分自身が出来ることを大切にしたいです」「毎日がチャレンジなので、今やっていることが先につながってほしいと思います」などがたくさん感想があげられていました。

出来ないとおきらめるのではなく、小さなチャレンジの積み重ねの大切さを今回の「明日チャレ」で教えていただくことができました。



中学校での人権講演会

昨年度、四日市市の中学校で、盲学校の視覚障がい者を有する教員が1年生7クラスの生徒を対象に、視覚障がいのことや、普段の生活について講演と体験を行いました。

講演では、全盲と弱視の違いやその中で困っていることを中心に話を進めました。眼科医師会の報告では、全国には見え方に問題がある人が170万人近くいるということを伝え、身近な問題として感じてもらったのではないかと思います。

アイマスクをつけての体験では、歩行と手引き仕方、支援機器の紹介を行いました。アイマスクでの歩行は、みなさんビックリして慎重に歩いていました。生徒からは「怖かった」という感想が多かったのですが、手引きをすると「安心して歩けた」という感想が多く聞かれました。また、「手引きしてくれる人との信頼感が大きい」といったような感想もありました。

バリアは人と人の壁

講演の中では、タッチパネルに近づきすぎて鼻でボタンを押してしまったこと、自販機などで間違って違う物を買ってしまったことなどの話もしました。その時のエピソードをおもしろ体験として話し、何人かの生徒はその話に笑ってくれましたが、大半の生徒は笑っていいのかなと考え躊躇していました。

世界中にたった一人しかいなければ、視覚に障がいがあってもそれを知る方法はありません。みんなと違っていることや当たり前のように出来ることができないことを人は障がいと呼ぶのです。バリアはその困り感をなくすことなのです。スロープをつけることや点字ブロックを敷くことだけがバリアフリーではありません。困り感を共有し、解決すること。心と心の壁を取り除くこと。躊躇する気持ちを勇気に変えて、その人の困り感に寄り添えるような世界が本当のバリアフリーだと思います。生徒のみなさんに勇気を出して困っている人に声をかけてみてくださいとお伝えしました。

生徒からは、「周りを観察して、困っている人がいれば、声をかけてみよう」、「自分の身近なところにもそういう人がいないか観察することが大事だ」などの感想がありました。逆に困っていることがある人は、それを人に話す勇気を持ちましょう。障がいがある人自身でバリアを張ってしまい、それが人と人の壁を自分自身で築いてしまうこととなります。そして、それが自分自身の生きづらさに繋がってしまいます。

障がい者差別の問題だけでなく、中学生の身近にあるいじめの問題などは、興味を持って人を観察すること、人を好きになること、そんな当たり前のことができれば、これらの問題は解決していくのだと思います。